

ドイツ中等社会系教科における地理カリキュラム：
自然地理の扱いに着目して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-06-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山本, 隆太 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008808

ドイツ中等社会系教科における地理カリキュラム

—自然地理の扱いに着目して—

山本 隆太（静岡大学大学教育センター 非常勤講師）

はじめに

日本の中等社会科における地理的分野のカリキュラムは、地誌学習で構成されている。一方、国際的な地理教育の動向に目を向けると、例えば、イギリスが地誌学習からテーマ学習や課題解決学習へと移行した(志村 2009)ように、地理カリキュラムの国際的な潮流は、地誌学習からテーマ学習に向かっていると見える(金 2012)。ただし、イギリスをはじめとする国々では、地理が独立教科として存在しており、日本の社会科地理的分野という教科枠組みとは事情が異なっている点に留意する必要がある。その点、本稿でとりあげるドイツは、日本と同様、社会科という枠組みを有し、しかも地誌学習を基礎としたカリキュラムを維持している。加えてドイツは、地理教育国際宣言であるルツェルン宣言(IGU-CGE 2007)がドイツ人中心の起草委員会によって公刊されるなど、国際的なプレゼンスも高い。ドイツの地理教育の現状分析は、これからの日本の地理教育の在り方を考える上でも参考となるであろう。

ドイツにおける地理学習は、初等教育段階では日本の生活科に類する事実教授(Sachunterricht)に、中等教育段階では社会系教科に位置づけられている(池野 2008)。ドイツ全 16 州のうち、中等教育段階(ギムナジウム)で社会系教科という枠組みを採用しているのは、ノルトライン・ヴェストファーレン州、ヘッセン州、シュレスビヒ・ホルシュタイン州、バーデン・ヴュルテンベルク州、ブランデンブルク州の 5 州である。その他の 11 州では、地理は単独教科の地理科として存立している。

社会系教科の名称は、共同体科(ゲマインシャフトクンデ: Gemeinschaftskunde)、総合社会科(ゲゼルシャフトツレーレ: Gesellschaftslehre)、社会誌(ゾチアールクンデ: Sozialkunde)、社会科学(ゾチアールヴィッセンシャフト: Sozialwissenschaften)など多様であり、また、その内容や教育課程上の位置づけも各州教育省次第である(近藤 2005、72)。中等教育段階の社会系教科に共通している点は、政治教育(politische Bildung)を学習目標の中心に据えていることである(服部 2012)。これに基づき、社会系教科の地理的分野では、政治教育を上位目標としつつ、地理教育の目標である空間行動コンピテンシー(raumbezogene Handlungskompetenz: 空間的な理解・思考・行動に関わる能力)の育成を、政治教育に準ずる目標として掲げるのが一般的である。

社会系教科の学習は、主に社会的な内容を扱うものであるといえるが、地理で扱う内容には自然的な内容も多分に含まれている。とりわけドイツの地理学習の特色は、教科目の存立形態を問わず、自然科学と社会科学の架け橋や領域横断的学習であると喧伝されている(Schindler 2005, 25)。ただし、その具体像についてはこれまで明らかにされていない。特に、この地理学習の架け橋や領域横断的学習といった特性を考察するにあたってはまず、自然地理の扱われ方と、それが社会地理の扱いに与える影響について検討する必要がある。そこで本稿では、社会系教科を設置する上記 5 州の地理カリキュラムを比較検討し、社会系教科地理的分野における自然地理の位置づけを明らかにすることを目的とする。対象学年は日本の中学校に相当する 7 年生以上、ギムナジウム上級段階未満とした。

1 ドイツ中等社会系教科に関する動向

(1) 社会系教科という教科枠組み

社会系教科には様々な名称があることは上述の通りである。共同体科は、1960年の教育改革によって生まれた社会系科目の統合教科である。その設置理由については、科目や学習内容の削減、科目による縦割り分割の回避、現実社会との結びつきなどが挙げられている(Köck 2005a)。一般的に、南ドイツ諸州は各科目の独立を維持したが、その他諸州は統合科化したといわれており、ヘッセン州やノルトライン・ヴェストファーレン州が統合化した州の典型とされることがある。その際、教科名は社会誌や社会科学という呼称の場合もある。総合社会科は、とりわけ1970年代以降に成立した中等科社会系統合教科の呼称であり、歴史/社会/地理の比較的緩やかな統合形態である(Köck 2005b)。

(2) カリキュラムについての近年の動向

服部(2009)は、1980年代・90年代の社会系教科カリキュラムについて分析を行っている。地理についてもヘッセン州、バイエルン州、ノルトライン・ヴェストファーレン州、ニーダーザクセン州のカリキュラムについて詳細な分析結果を残しているが、本稿で扱う自然地理という観点から論じられたものではない。また、ドイツ各州のカリキュラムは2000年以降に大きな変化を経験したことは見逃せない。2001年12月に公表された経済協力開発機構(OECD)のPISA学力調査は、ドイツの生徒の学力が平均以下であることを示し、これが現代ドイツの教育改革の契機となった(大友 2009)。この教育改革においてカリキュラムはコンピテンシー(能力・資質)によって構成される形式(「生徒は～ができる」という学力のアウトプット重視型)に大きく移行した(服部 2009)。この移行期の研究には大高(2010)がある。大高(2010)は、バーデン・ヴュルテンベルク州の2004年版地理カリキュラムを分析し、地理カリキュラムはコンピテンシー志向ではなく学習内容志向で構成されていたこと、教科(内容)コンピテンシーと方法(スキル)コンピテンシーの対応関係はカリキュラム分析のみでは確認できないことを指摘した。この研究以降、ドイツ地理に関するカリキュラム研究は管見の限り報告されていない。なお、最近のドイツの歴史学習については、宇都宮(2013)が、1990年代・2000年代のカリキュラム分析に基づき、ドイツの構成主義的な歴史学習論について論じている。

2 社会系教科地理のカリキュラム分析

(1) ノルトライン・ヴェストファーレン州

ノルトライン・ヴェストファーレン州の地理教育の目標は、生活現実の理解と社会参画を実現する力としての、空間行動コンピテンシーの育成である(MSWNW 2007)。このコンピテンシーはさらに4つの下位コンピテンシーである事象コンピテンシー、方法コンピテンシー、判断コンピテンシー、行動コンピテンシーから構成されている(表1)。

自然地理の扱いについては、人間の経済活動の基礎として、自然地理を学ぶことが明記されている。このことは、表1の事象コンピテンシーにおける、人間の生活・経済基盤に対する自然の影響や、地生態学的リスクとその回避といった記述から確認できる。続いて、カリキュラム(表2)を見ると、生活空間に対する脅威としての自然災害や、熱帯雨林の自然地理的作用構造とそこから導き出された生態系適合型経

済活動の可能性と課題、といった内容に見られるように、人間中心的な観点から自然が扱われていることがわかる。また、土壌侵食などを引き起こす「不適切な介入」という言葉が指し示すのは、適切な人為的介入の存在を暗示しているように解釈できなくもない。その他、農業という視点からみた自然の利用可能性や、天然資源が間接的に引き起こす世界的格差といった内容は、経済活動を軸にした自然観を積極的に育むものといえる。ここでは、世界学習が主軸であることも含めて考えると、育むべき世界観が経済的視点に立脚していることが指摘される。しかしその中にも、気候と植生の共作用としての景観帯の理解といった、経済と直結しない純粋な自然地理的内容も、例外的ではあるが、含まれている。

こうした経済的・政治的観点は、各科目で分担して扱われる(表 3)。詳しく見ると、政治教育的側面の 4「政治経済に対する生態学的課題」と、経済教育的側面の 7「生態学的課題／生態系と経済のバランス」は歴史・政治経済と比して、地理教育の比重が高くなっている。政治経済と生態系のバランスに関する視点は、社会系教科において地理教育が、その科目特性を活かしながら育むべき視点であるといえる。

(2) ヘッセン州

ヘッセン州の地理教育の目標は、様々な生活状況において、環境に対する責任感を持って行動する、という空間行動コンピテンシーの育成である(HK 2010)。本州では、下位コンピテンシーについての記述はない。

地理学習の中心テーマは、自然および人間活動によって特徴づけられた空間とされている。しかし、現代的諸課題やその解決方法を地理で扱う場合には、人間の空間的な振る舞いと、そこから派生する空間的現象との関係性を考えるという、人間空間関係(Mensch-Raum-Beziehung)の見方に依拠して考察することが求められている。言い換えれば、自然－人間から成る空間を、課題解決に際しては、人間－空間関係の観点から考察するということである。

ヘッセン州のカリキュラムでは、地理的分野は主に 8・9 年生で扱われる(表 4・表 5)。8 年生ではグローバルな空間と秩序システムの学習や、野外学習・実験などの実習が行われる(表 4)。9 年生では、グループで地域を設定し、各地域について、課題解決的な空間分析や、クラスでのディスカッションを行い、最後にプレゼンテーションを行う(表 5)。ここでは、南極大陸を除いた 5 つの大陸を事例として取り上げ、開発の可能性や課題について討論する。

ヘッセン州の地理的分野のカリキュラムは、8 年生では自然地理的な内容を系統的に学び、9 年生では課題解決的な地誌学習や、空間分析へと展開している。自然地理的な学習を基礎とした課題解決型地誌学習が展開されているといえる。

(3) シュレスビヒ・ホルシュタイン州

シュレスビヒ・ホルシュタイン州では、地理教育の目標を、事象コンピテンシー、方法コンピテンシー、自分自身の省察と関わる自律コンピテンシー、他者との協働や参画と関わる社会コンピテンシーの 4 つから構成している(MBWFKSH 1997)。これらのコンピテンシーは、空間に配慮した行動を実現するためのものと解釈されるため、ここでも空間行動コンピテンシーが地理教育の目標とされているといえる。

シュレスビヒ・ホルシュタイン州では、人間空間関係が 5・6 年生の地理学習のテーマとされており、7・8 年生では空間に対する自然的・人為的な作用と、人間への影響が扱われている(表 6)。9・10 年生では、様々な空間における現代的諸課題の持続可能な課題解決がテーマとされている。

カリキュラムの展開を見ると、7・8年生では様々な発展状況にある諸地域を主題に沿って学習し、9年生ではグローバルスケールにおける生態系と経済の関連性についての学習が扱われている。こうした主題学習や、自然と経済の関係性の学習において、主題図や統計データの読み取り、メディア情報の批判的解釈といった方法論も獲得することも求められている。

(4) バーデン・ヴュルテンベルク州

バーデン・ヴュルテンベルク州では、複雑な世界の構造を理解し、他者との協調を通じて課題を解決するという空間コンピテンシーが、地理学習の重要な目標とされている(MKJSBW 2004)。下位コンピテンシーには、方法コンピテンシーと教科コンピテンシーの2つが与えられている。方法コンピテンシーは、学年修了後に活用できるスキルや方法論を示す。教科コンピテンシーは、その学年で扱う内容を規定するテーマとスタンダードから構成される。

カリキュラムの基本方針では、自然地理的・地質的なプロセスの基礎的理解が他に先立って学ばれることが記されている。自然地理・地質的内容の分析的・システムモデル的な学習経験は、その後の複雑な現象理解に役立つことが期待されているためであると考えられる。

地理的分野のカリキュラム(表7)を見ると、7・8年生の気候帯の単元は、自然地理的内容で構成されている。しかし、後続の人口動態、移民、モビリティなどのグローバルな課題との内容的な関連性は見当たらない。9・10年生では、人間活動による空間的特色と、岩石圏の学習の間には大きな内容的な隔たりが認められる。9年生では人間活動による空間的特色について、7・8年生までの内容を踏まえた学習がなされると考えられる。岩石圏以降は大気圏を含めて自然地理の系統的な学習が配置され、その後に大気の問題が扱われることから、岩石圏から大気の問題までを一つの学習の展開と見なすことができる。

7・8年生ではグローバルな観点から自然地理を扱う一方、9年生では自然地理の内容は扱われないが、10年生に再び自然地理が系統的に配置されている。自然地理的内容は、グローバルスケールのものが扱われているため、スケール感の獲得と、圏構造に基づく地球システム的な考え方の育成が目指されているといえる。

(5) ブランデンブルク州

ブランデンブルク州のカリキュラムにおいても、空間行動コンピテンシーが地理教育の目標とされている(MBJSB 2008)。下位コンピテンシーには、空間オリエンテーション、空間評価、空間分析・探究、空間理解・課題志向、空間的自覚・責任性の5つが設定されている。また、各学年段階で獲得する方法・スキルに関しては、3段階の難易度(例:場所を見つける→場所を記述する→場所の関係性を記述する)が記載されている。

ブランデンブルク州は、典型的な地誌的なカリキュラム構成である(表8)。ただし、静態地誌的な事象の羅列ではなく、「地域配列に従った系統地理学習」が組み込まれている。自然地理的内容について取り上げると、7・8年生のアジアにおいては、湿潤変動帯に関わる自然地理的内容が多い。中央・北アジアにおける自然空間の開発利用やアラル海シンドローム、乾燥地帯の生活におけるサヘルシンドロームなど、中央・北アジアと乾燥地帯では、環境開発問題を課題解決的に扱う視点が含まれている。南北アメリカにおいて自然地理は、空間条件という静態地誌的な位置づけとなっている。

3. まとめ

以上のカリキュラムの分析の結果は、表9のようにまとめられる。社会系教科の地理教育の目標は、

空間行動コンピテンシーの育成であった。また、ドイツの中等科社会系教科の地理学習といっても、主題学習、地誌学習、系統地理学習など様々なタイプが確認された。ノルトライン・ヴェストファーレン州の自然地理は、政治経済と生態系のバランス感覚を養うための自然地理学習であった。一方、ヘッセン州は、8年生では系統地理学習の色合いが強くみられ、続く9年生では、課題解決的地誌学習が配置されていた。このことから、系統地理学習の学習事項を、課題解決的な地誌学習において応用的に用いるという学習展開が示唆された。シュレスビヒ・ホルシュタイン州のカリキュラムからは、地誌学習における主題的な自然地理学習が、地域のスケール感を獲得するために有用であることが示唆された。バーデン・ヴュルテンベルク州も同様に、スケール感を獲得するための自然地理学習と解釈できる。地誌学習が色濃いブランデンブルク州では、主題、課題解決など様々な自然地理の扱われ方が見られた。

4. おわりに

本稿では、社会系教科の地理カリキュラムについて全5州を取り上げて比較検討した。その結果は以下の通りである。

- ・社会系教科地理的分野の目標は、空間コンピテンシーの育成である。
- ・政治教育が目標である社会系教科では、地理的分野のうち、社会地理的な内容が前面に強調されていたが、自然地理的な内容も多分に含まれていた。自然地理の扱われ方は、系統地理、スケール感導入型主題地理、静態地誌学習、課題志向型地誌学習など様々であった。とりわけ、ヘッセン州のような自然地理と課題志向型地誌学習を有機的に結び付けたカリキュラムは、社会系教科における自然地理の位置づけとしては示唆に富んでいた。しかし、自然地理の内容過多といった課題が考えられる。
- ・社会系教科特有の地理的見方は、自然空間を、人間生活の基盤や天然資源の所在として見なすという、人間中心的・経済観念的自然観であった。そのため、自然空間が人間にとって有用か否か、持続可能に経済的開発は可能か否かが、自然を扱う際の着眼点であった。
- ・社会系教科における地理学習では、空間に対する視点が、人間空間関係(Mensch-Raum-Beziehung)となる。これはドイツで一般的に地理特有の見方とされる、人間自然関係性(Mensch-Umwelt-Beziehung)と比べると、人間中心的な視点を持った概念であることが強く示唆される。
- ・自然地理学習には、スケール感を獲得するという学習機能があることが示唆された。この自然地理学習は、後続の人文地理的な学習内容や課題解決学習などに対して、スケール感を予め獲得しておくためのものと考えられる。

今後の課題としては、自然科学と社会科学の架け橋や領域横断的学習の実態について深く考察するために、地理科単独のカリキュラムの分析も含めて、ドイツの地理カリキュラム全体を包括的に論じる必要がある。また、最後に一点、社会系教科における自然地理の役割について言及したい。一般に、社会系教科では自然地理の扱いが少なくなるため、限定的な自然観を扱うことになる。この自然観によって、どの程度まで、人間も含めた地球全体の動態(システム)に配慮した、持続可能な行動が導き出せるかは不明である。この点は社会系教科だけに課せられた命題ではないが、見方を変えれば、人間を扱えない理科系教科では踏み込むことができない領域であり、社会系教科だけが解決できる教育的課題でもある。非常に大きな課題ではあるが、ここに、地理教育の教育的意義を広く知らしめ、プレゼンスを高める好機が潜んでいること、そのためには、環境と経済を結び付ける具体的な学習方法の開発が急務であること、この点を強調しておきたい。

5. 引用文献

- 池野範男 2008 「ドイツの社会認識教育」 森分孝治・片上宗二編『社会科 重要用語 300 の基礎知識』明治図書、32.
- 宇都宮明子 2013 『現代ドイツ中等歴史学習論改革に関する研究：現実的変革の論理』風間書房.
- 宇都宮明子 2013 『現代ドイツ中等歴史学習論改革に関する研究』風間書房.
- 大高皇 2010 「ドイツにおける地理教育カリキュラムと教育スタンダードの展開—バーデン＝ヴュルテンベルク州教育スタンダードを事例として—」『社会科教育研究』110、130-142.
- 大友秀明 2009 「学力論の相克 1:「PISA ショック」とドイツの政治教育」. 坂井俊樹・小揺史郎・重松克也・竹内裕一 『社会科教育の再構築をめざして—新しい市民教育の実践と学力—』東京学芸大学出版会、50-63.
- 金玄辰 2012 「地理教育の世界的動向:カリキュラム分析を通して」 E-journal GEO 7(1)、82-89.
- 近藤孝弘 2005 『ドイツの政治教育』岩波書店.
- 志村喬 2009 「イギリスの地理教育」 中村和郎・高橋伸夫・谷内達・犬井正 『地理教育の目的と役割』古今書院、129-145.
- 服部一秀 2009 『現代ドイツ社会系教科課程改革研究』風間書房.
- 服部一秀 2012 「ドイツの社会科の動向」日本社会科教育学会(編)『新版社会科教育事典』ぎょうせい、366-367.
- HK: Hessisches Kultusministerium 2010. Lehrplan Erdkunde. Gymnasialer Bildungsgang. Jahrgangsstufen 5G bis 8G und Gymnasiale Oberstufe. 42.
- IGU-CGE: International Geographical Union - Commission on Geographical Education 2007. Lucerne Declaration on Geographical Education for Sustainable Development. 大西宏治(訳) 2008 「持続可能な開発のための地理教育に関するルツェルン宣言」新地理 55(3/4)、33-38.
- Köck, H. 2005a. Gemeinschaftskunde. In Köck, H. and Stonjek, D. (Ed) ABC der Geographiedidaktik. Aulis. p.106.
- Köck, H. 2005b. Gesellschaftslehre. In Köck, H. and Stonjek, D. (Ed.) ABC der Geographiedidaktik. Aulis. pp.115-116.
- MBJSB: Ministerium für Bildung, Jugend und Sport des Landes Brandenburg 2008. Rahmenlehrplan für die Sekundarstufe I. Geografie. 32.
- MBWFKSH: Ministerium für Bildung, Wissenschaft, Forschung und Kultur des Landes Schleswig-Holstein 1997. Erdkunde. Lehrplan für die Sekundarstufe I der weiterführenden allgemeinbildenden Schulen Hauptschule, Realschule, Gymnasium. 38.
- MKJSBW: Ministerium für Kultus, Jugend und Sport. Baden-Württemberg 2004. Bildungsstandards für Geographie im Rahmen des Fächerverbundes Geographie-Wirtschaft-Gemeinschaftskunde. Bildungsplan 2004. Allgemein bildendes Gymnasium. 237-247.
- MSWNW: Ministerium für Schule und Weiterbildung des Landes Nordrhein-Westfalen 2007. Kernlehrplan für das Gymnasium – Sekundarstufe I (G8) in Nordrhein-Westfalen. Erdkunde. 35.
- Schindler, J. 2005 Syndromansatz. LIT.

表1 ノルトライン・ヴェストファーレン州中等科地理コンピテンシー(7-9年生)

事象コンピテンシー

- ・あらゆるスケールにおける、位置の特定
- ・自然地理的な構造・プロセスの記述と、人間の生活・経済基盤に対する影響の説明
- ・人間が与える地生態学的なリスクとその回避方法の探究(地域的特色を考慮して)
- ・都市が抱える構造・機能の意義についての説明(様々な利害関係と影響の帰結)
- ・人口動態やグローバリゼーションの影響による都市空間と地方空間の変化
- ・人口の世界的分布の原因・結果の探究
- ・構造変化における第三次産業の重要性拡大と、経済地区の連携拡大に関する理解
- ・ポスト工業社会への変化におけるサービス業の意義の探究
- ・発展途上国における観光の是非
- ・開発指標に基づく格差の分布・原因・結果の分析とその克服方法の説明
- ・政治社会経済の変化による空間利用の変化の説明
- ・各内容に対する専門用語・概念の運用

方法コンピテンシー

- ・地図の活用と現地学習
- ・課題設定と推察、適切な作業方法の選択
- ・地図・統計・図表を用いた情報収集と、諸事象の関係性の探究
- ・コンピューターを用いた地図・図表の作成による地理情報の可視化
- ・文献探索・オンライン資料検索による情報収集
- ・WebGISの利活用による情報収集
- ・系統地理的方法と地誌学的方法の区別
- ・単純なモデルから、系統地理的内容と空間要素の関係性の読み取り
- ・専門的概念を用いた地理的事象の表現

判断コンピテンシー

- ・設定した課題に対する作業方法の批判的検討と空間的生活現実の関連性の評価
- ・メディア表現における恣意性の理解
- ・調査結果・方法の妥当性の批判的検討
- ・生活空間に対する様々な社会集団の利害要求関係の吟味
- ・様々な考え方に配慮した根拠ある判断と主張
- ・持続可能性を考慮した上での具体的な対応策の判定
- ・その結果も含めた自身の空間コンピテンシーの自己批判的な省察

行動コンピテンシー(実践可能な範囲)

- ・ヒアリング・アンケート調査、地図化の計画・実施と結果の地理的・課題解決的な表現
- ・空間利用の紛争に関するディスカッションにおいて根拠ある解決策を主張
- ・空間プロセスに対する民主主義的な意見表明機会の利用
- ・持続可能な経済を念頭に置いた、身近な環境の生態系に対する責任感ある行動

注) 各項目は原文では「生徒は以下のことができる」という記述となっている。

(Ministerium für Schule und Weiterbildung des Landes Nordrhein-Westfalen 2007.
をもとに筆者作成)

表2 ノルトライン・ヴェストファーレン州中等科地理カリキュラム(7-9年生)

必修テーマ	必修重点領域
自然や人間によって危機にさらされる生活空間	<ul style="list-style-type: none"> ・地理的リスク(地震、火山、ハリケーン)による脅威 ・自然収支に対する人間の不適切な介入によって引き起こされる脅威(土壌浸食、砂漠化、地球温暖化、洪水)
それぞれの景観帯における生活と経済	<ul style="list-style-type: none"> ・耕作の制限要因としての気温と水、またその自然的制限を克服する方法 ・乾燥地帯の人為的な利用変化とその帰結の良し悪し ・熱帯雨林の自然地理的作用構造と、そこから導き出された生態系適合型経済活動の可能性と課題 ・農業利用に適した温帯空間 ・気候と植生の共作用による景観帯という空間的特色
国内およびグローバルな空間的不均衡という課題	<ul style="list-style-type: none"> ・経済開発状況の理解のために重要な指標 ・天然資源、労働市場、政治経済的目標に基づいた空間発展 ・富と貧困の世界的格差の原因である天然資源と、産業製品の不均衡な交換 ・現地の発展に寄与する第三世界観光の可能性とリスク
グローバル影響下の経済空間と政治の構造変化	<ul style="list-style-type: none"> ・世界的分業下における地域構造の変容 ・自然条件、国際貿易、環境負荷の緊張領域：農業 ・構造変化、トランスフォーメーション、統合の文脈におけるEU地域間の競争 ・変化した国際貿易関係の象徴としてのグローバルシティー
上記内容群に関する、位置・地名等の基礎的内容	<ul style="list-style-type: none"> ・地球上の景観帯 ・地球上の変動帯 ・地球上の社会経済的区分 ・EU加盟国における積極的経済空間・消極的経済空間 ・経済地域間の国際貿易

(Ministerium für Schule und Weiterbildung des Landes Nordrhein-Westfalen 2007. をもとに筆者作成)

表3 ノルトライン・ヴェストファーレン州 社会系教科科各分野の分野横断性

	地理	歴史	政治経済
政治教育的側面			
1. 民主主義の維持と更なる発展	なし	○○○	○
2. 経済と労働	○○	○○	○○
3. 国際化やグローバリゼーションのチャンスと課題	○○○	○○	なし
4. 政治経済に対する生態学的課題	○○○○	○	○
5. 新技術のチャンスと課題	○	○○	○
6. 現代社会変革におけるアイデンティティーと生活の構築	○○	○○	○
7. 個人の自由と構造的不均衡の間の社会的正当性	○○	○○	○
8. 平和維持と紛争解決	なし	○○○	○
経済教育的側面			
1. 消費活動と販売戦略	○	なし	なし
2. 競争、集約、市場権力による市場プロセス	○	○○○	○
3. 金融業・貨幣価値の安定化	なし	なし	○
4. 生産・技術進歩・構造変化	○○○	○○○○	○○
5. 変化する工業・サービス・情報社会の労働と職業	○	○○○	○○
6. 業績評価と社会的正当性間の収入と社会保障	○○○	○○	○
7. 生態学的課題／生態系と経済のバランス	○○○○	○○	○
8. 国際化とグローバル化による社会市場経済の課題	○○○	○	○○

○は該当単元（ひとつの○：1単元）を表す

(Ministerium für Schule und Weiterbildung des Landes Nordrhein-Westfalen 2007. をもとに筆者作成)

表 4 ヘッセン州中等科地理カリキュラム(8年生)

8年生 人間にとって重要な自然要素 世界の空間事例から	
テーマ	内容
目的	
緯度経度と宇宙における地球、気候と植生の関連、外的営力・内的営力のダイナミクス、自然収支に対する人間活動の影響	
必修	
緯度経度	座標系、絶対位置の特定、時間帯
地球の動きの影響	地軸、自転、公転、天頂、極圏、回帰線、季節(地球儀)
地球上の気候帯と植生帯	気候帯・植生帯(帯状配列のみ)、気候ダイアグラムの読解
地形：外的営力と内的営力の作用	岩石と水の循環(風化、浸食、堆積)、火山、プレートテクトニクス、地震、山脈
自然収支に対する人間活動の影響	土壌浸食、砂漠化、地下水位低下、水利工事、水資源利用、ステップ化、塩類土化、過放牧、生態系
選択	
熱帯雨林	移動式焼畑農業、アメクメーネ境界領域の生活
極地域	アメクメーネ境界領域の生活
学習方法	
<ul style="list-style-type: none"> ・気候ダイアグラムや座標点の扱いに際して、データの解釈と評価 ・地理的事象や課題について既知の知識や考え方に基づいた評価や判断 ・身近な野外巡検の実施、あるいは、火山や地溝帯の立体模型作り 	
関連する他教科領域	
<ul style="list-style-type: none"> ・資源の取り扱い：英語、政治経済、化学、ラテン語 ・モデル構築：芸術 ・熱帯雨林：英語 	

(Hessisches Kultusministerium 2010.をもとに筆者作成)

表5 ヘッセン州中等科地理カリキュラム(9年生)

9年生 構造変化と発展可能性 世界の空間事例から	
目的	
空間のなかの自然的造形、人間による自然資源と利用、構造変化・開発機会・開発問題、全大陸の地誌的基礎知識、課題解決的な空間分析の基礎、プロジェクト学習への導入	
地域	内容
必修	
ライン・マイン地域	経済構造、就業機会、交通、地域変化、グローバリゼーションの地域的影響
ロシア	豊かな天然資源、縁辺地域の開拓と発展、生態系の問題
日本	乏しい天然資源、経済行動の社会文化的基礎、ハイテク産業、地震・津波といった自然の猛威による危険
中国	人口動態、一人っ子政策、縁辺地域の発展、香港
インド	モンスーンの影響、人口増大、子供の就労、女性の役割、緑の革命、ハイテクの発展
アメリカ(東部)	天然資源、メガロポリス、世界経済的優位、ラストベルトの構造変化
南アメリカ	植民の影響、熱帯雨林の利用、メトロポールとファヴェイラの問題
アフリカ	人口動態、食糧状況、砂漠の拡大、熱帯雨林の利用、エイズ、民族紛争
オーストラリア	豊かな天然資源、人口分布、アジア人労働力と移民
世界の空間編成	ヨーロッパの地誌、既習地域の地誌的内容の振り返り
選択	
アメリカ(西部)	人種の多様性と社会的セグリゲーション、シリコンバレー、観光と国立公園
近東	石油、乏しい水資源、イスラム教の意義、イスラエルと近隣諸国
ブルーバナナ	ハイテク産業の中心としての歴史的蓄積、危機、助成金、構造変化
学習方法	
<ul style="list-style-type: none"> ・プレゼンテーション(グループ学習) ・地図、図表の利用 ・協同的学習、地理的課題のスケールを加味した学習 ・インタビュー、引用、統計データの結びつけ、不足データの認識 ・行動につながる見方・考え方の育成 	
関連する他教科領域	
<ul style="list-style-type: none"> ・資源の取り扱い：英語、政治経済、化学、ラテン語 ・熱帯雨林：英語 ・都市：芸術、歴史、英語、フランス語、ラテン語、ギリシア語 ・経済産業化：政治経済、歴史、英語、独語、ロシア語、イタリア語、ラテン語、芸術 ・植民地：歴史、カトリック(宗教)、福音派(宗教)、スペイン語 	

(Hessisches Kultusministerium 2010.をもとに筆者作成)

表 6 シュレスビヒ・ホルシュタイン州中等科地理カリキュラム(7-9年生)

テーマ	内容
7 年生	
中近東：水と石油という権力要素	巨大な砂漠地帯、イスラム教の生活形態、乾燥地帯と水利：生活条件としての水、石油による発展、近東の複雑な利害関係
地球上の人口	熱帯地域の景観帯と栄養源、アフリカ：空腹を問う、サヘル地帯：拡大する砂漠との戦い、自給経済とプランテーション：伝統的な生産形態とヨーロッパ由来の生産形態、世界経済に対するアフリカの土壌保護、ブラジル：ラテンアメリカの鍵国、メキシコ：工業国家、ラテンアメリカ：都市的生活の向上、1492-1992：アメリカにおけるヨーロッパ人の 500 人
経済大国アメリカ	様々な顔を持つ国、農家・牧場主・アグロビジネス、古くて新しい工業空間、アメリカ的生活様式、人種のるつぼとしての NY
8 年生	
ロシア：CIS の中心国	大陸性気候：夏は温かいシベリア、大陸空間の開発問題、経済の転換期、自然的生活基盤の破壊、ロシアと近隣諸国
伝統とモダンのあいだ	インド：伝統的社会における生活と経済、中国：中央集権と市場経済開放、中国とインド：人口増大と人口計画
世界の単一性と多様性	貧困の負のスパイラル、第三世界：繁栄モデル、一つの世界：10 の文化大陸
9 年生	
海の生態系	海洋と大陸、海の天然資源・食糧確保、海洋の危機、気候に対する海洋の影響
環太平洋地域：世界経済の駆動力	日本：工業大国と国際競争力、アジアの虎諸国(シンガポール、台湾、韓国、マレーシア、タイ、香港)：世界経済の新たなパートナー、環太平洋地域の新たな経済共同体(ASEAN、NAFTA、APEC)
エネルギー：欠乏の危機か過剰か	石油エネルギー：埋蔵・消費・環境負荷、脱原発の可能性、エネルギー節約と代替エネルギー、ドイツのエネルギー事情とエネルギー政策
惑星としての地球	宇宙空間の地球、プレートテクトニクス、火山、地形、地球史

(Ministerium für Bildung, Wissenschaft, Forschung und Kultur des Landes Schleswig-Holstein 1997.をもとに筆者作成)

表7 バーデン・ヴュルテンベルク州中等科地理カリキュラム(7-10年生)

7・8年生	
方法コンピテンシー	
モデルの利用、主題図の読図と GIS 利用、気候ダイアグラム・フローチャート・円グラフ・機能断面図の作成、人口ピラミッド・統計データの読解、コンピューターシミュレーション、衛星画像判読、報告書・壁新聞での情報発信	
テーマ	スタンダード
各気候帯の自然空間・生活空間・経済空間	気温分布と季節の生成、気候と動植物・人間の適応関係、熱帯大気循環、気候要素・気候因子、植生に対する人為的影響、気候帯の空間分布と地理的空間区分
ひとつの地球・ひとつの世界	将来的な人口拡大の予想と課題、グローバル市場における流通・分業・競争、グローバル自由経済の可能性とリスク、世界の開発格差、ひとつの世界に向けた開発対策と持続可能な経済の実現方法
世界に広がるモビリティ	世界の人口の構造と分布、モビリティの形態と交通構造、貿易における経済と交通の関連、持続可能な行動の観点からみた観光の機能と影響、移民・難民の原因と影響、持続可能な交通とモビリティの可能性
9・10年生	
方法コンピテンシー	
岩石と鉱物の特定、天気図・衛星画像の判読、作用構造図の作成、シミュレーション、理論モデルの操作、GIS 分析、空間分析	
テーマ	スタンダード
人間活動による空間的特色	人間が空間に与える影響とその構造・プロセスの分析、空間モデル、単一構造と複数構造、社会集団と社会の空間的影響、都市設計・空間計画の可能性と限界
岩石圏の展開と構造	地球史の基礎、地球の内部構造、岩石の生成と持続可能な利用、大陸移動・海洋底拡大、プレートテクトニクス
大気圏プロセス	大気圏の構造、熱収支、気候要素・気候因子の共作用による気象、大気大循環
大気の危機と保護	気候の自然的変化、地球環境変動における人為的作用と大気の関係、政治・社会における大気汚染防止対策、技術的なエネルギー効率向上の可能性、持続可能な都市発展戦略
(Ministerium für Kultus, Jugend und Sport. Baden-Württemberg 2004.をもとに筆者作成)	

表 8 ブランデンブルク州中等科地理カリキュラム(7-10 年生)

テーマ・地域	内容
7・8 年生	
中央・北アジア：空間ポテンシャルと利用	国・規模の比較、自然空間の開発と利用、気候と植生の関係、アラル海シンドローム
アジア：極端な自然空間	プレートテクトニクス(山脈形成・地震・火山)、モンスーン、洪水、自然災害と生活
東南アジア：事項動態と経済力	人口動態、各国の経済力、人口問題
中近東：緊張空間	石油と水、湾岸諸国・イスラエル・トルコ、伝統とモダンの隣りあわせ
乾燥地帯の生活	最大の砂漠サハラ、自然空間の利用問題、サヘルシンドローム
サハラ：課題山積の空間	自然空間の利用ポテンシャル、社会経済政治的状况、低開発状態からの脱却
9・10 年生	
南北アメリカ：対照的な大陸	自然空間の多様性(大地形、気候植生帯)、生態系・熱帯雨林・農業の基盤、空間の耐久性、アングロ・サクソン諸国・ラテン諸国の経済構造比較、グローバル化を加速するアメリカの経済力、都市という生活空間
オーストラリア・オセアニア・局地域	巨大な遠隔地、開拓と定住、経済ポテンシャル、繊細な生態系にまつわる問題
グローバルな将来シナリオとグローバル・ローカルな持続可能性への道程	気候変動と人為的影響、天然資源の枯渇、自然保護、持続可能性
ヨーロッパにおけるドイツ	ベルリン/ブランデンブルクの経済発展、ヨーロッパの経済空間比較、EU の目的とチャンス、格差

(Ministerium für Bildung, Jugend und Sport des Landes Brandenburg 2008.をもとに筆者作成)

表 9 社会系教科地理カリキュラムの 5 州比較

	NR	HE	SH	BW	BB
目標	空間行動コンピテンシーの育成				
7 年生 (内容)	自然災害、生活と経済、世界的な政治経済構造変化	(無し)	中近東、人口、アメリカ	気候・植生、世界的不均衡	アジア
8 年生 (内容)	世界的な政治経済構造変化	気候・土壌岩石・生態系、環境問題	ロシア、インド・中国	モビリティ	中近東 砂漠
9 年生 (内容)	人間生活の空間条件、天然資源、政治経済と生態系のバランス	課題解決的 空間分析	海洋、環太平洋地域、エネルギー	社会集団、岩石圏	アメリカ オセアニア
自然地理の扱い	人間生活の空間条件、天然資源、政治経済と生態系のバランス	系統学習→課題解決での応用	主題的自然地理学習	スケール感の導入 (複雑性理解)	主題的自然地理学習、課題解決

省略: NR:ノルトライン・ヴェストファーレン州、HE:ヘッセン州、SH:シュレスビヒ・ホルシュタイン州、BW:バーデン・ヴュルテンベルク州、BB:ブランデンブルク州 (筆者作成)